

二〇一三年一月二十日

顧問 渡辺忠成先生 稽古会 講義録

【九箇之太刀】

へ九箇概論

◇ 九箇とは、その名の通り太刀が九箇ということ。長岡桃嶺先生は「九箇は愛州移香斎が他流を研究した太刀の中から九つを選んで流祖（上泉信綱）に伝えた」と伝書に記載されているがそうではないと思っている。愛州移香斎が他流から取り集めた太刀の中から流祖が九箇で十分だと選んだものだと思う。例えば、天狗抄は構八本であるが、天狗抄の「抄」は「抄本（かすめとった本・写本）」という意味があり、最初は天狗勝と書いて現在の太刀数よりもっとたくさんあったものの中から、かすめ取って八本にしたものだと考えている。

◇ 同じ新陰流系統でも、直心影流系統には、天狗抄と燕飛はほとんど存在しないが九箇はある。それに対し、正田陰流の中には、燕飛の太刀は存在しないが、九箇、天狗抄のような技が多彩にある。流祖がまとめる前に（正田豊五郎が流祖から）教わったものだと思う。その証拠に愛州移香斎の子「小七郎」やその弟子、江戸時代の「陰流の目録」と思われるものの中には、我々が知らない太刀名がいっぱい出てくる。しかし我々は流祖が選択した「九箇」をやれば十分だということだ。

◇ 正田陰流など他流に伝わった技に負けない太刀として、石舟斎（柳生宗厳）が補足完成したのが「奥義之太刀」。しかし、奥義之太刀の一本目は九箇の一本目の「必勝」のくだき（変化技）みたいなもの。石舟斎は九箇を知っておけば、同じ新陰流余流に伝わっている技で、石舟斎に伝わっていない技を教習する必要はないという自負をもっていたように考える。

◇ 新陰流の一部の会派は、内伝しか稽古していないが、内伝のみではこれらのことはわからない。我々は、九箇は内伝以外に本伝、古伝を稽古する。新陰流は陰流から選んだ「燕飛之太刀」を基にして流祖が完成した「三学円之太刀」が中心になっているが、そのベースになったのは「九箇之太刀」である。九箇が歴史的に一番古いものということになる。現在の稽古では体術的なことをやらないのでわかりづらいかもしれないが、剣術と体術が分かれる以前の、蹴ったり突き飛ばして相手の首を刈りに行ったりという荒っぽい古流の技である。本伝、古伝になってくると、その世界へ入っていけるようになっていく。

◇ 「取り上げ使い」は算数で言えば、一から百まで数えるとか、せいぜい足し算、引き算がわかれば良い程度で、掛け算、割り算まではいかない程度の学習内容である。ただ、ポイントポイントで一回止まるのは、そこが大事ですよという意味で、三学円之太刀の取り上げ使いも同じことである。

◇ 体を動かして稽古をすることを中心に六十数年間ずっとやってきた。講義とかはやらずに、資料を読んで自分で考えるべきだと思っている。技、体のさばきに自信がない会派は、講義ばかりやって、実際の稽古はほとんどやらない。（忠成宗主が）高校生ぐらいから参加した厳長先生の講義は、他流の剣術家が聞いても全然分らない。新陰流の人でも目録クラスの人が聞いてもわからない。それを厳長先生は悦に入って話していたのを講義録にしても、読んでもわかる訳がない。厳長先生も講義の途中でびっくりして、これはまずいと気づいて、これは難しいから今回は省略とか書いてあったりする。昔の講義録を見ると面白い。古い太刀伝の解説も自分のレベルで書き出してしまう。その内にこれはわかる訳ないだろうなというものは「深遠な術理は体得し

た人でないとわからない」というように、パツと文章が変わったりする。講義というものは大変難しい。講義は、小学校、中学校、高校、大学、大学院という様にレベル別に分かれてすればよいが、全員に共通して講義することはできない。一部の宗教ならあるかもしれないが、宗教でもちよつと無理。ほとんど悟りに近い人に話すのと、「宗教の教えとはどんなものか？」とただ興味津津で聞く人に話すのでは内容が全然違う。ただ「自分は今はこのレベルだから高いレベルは聞かなくていい」ということではなく「少し高望みでもよいから、将来はどういう所まで理解して、できるようにならないといけない」という高望みはどんどんして貰ってよい。そうしないと上達しない。現状のままでもよいと思つたらいい。

〈必 勝〉

◇ どの技でも一本目の太刀が「技の象徴」である。「三学円之太刀」なら「一刀両段」が象徴的の太刀。「必勝」は九箇を象徴している太刀なのである。なぜ「必勝」なのか？ということであるが「左太刀になつても必勝をきすから」であり「必勝」の信念を持つて左太刀で勝つということ、そこから左太刀の技をすべて「必勝がち」という。

必勝がちには、天狗抄に「乱剣」という左太刀に持ち替えるものがある。また「奥義之太刀」の一本目も左太刀。「乱剣」「添載乱載」それぞれの太刀の「くだき（変化技）」をやると必勝がちになる。必勝がちと言つてもどれがどれかわからなくなつてしまふので、ネーミングを分けている。ところがくだき（変化技）をやると全部共通なので、どれがどれだかわからなくなつてしまふ。

◇ 塚原卜部の弟子に結城ノシンサイ政勝（ユウキノシンサイマサカツ※注）という人がおり、（この結城ノシンサイが左太刀を得

意としたとされている）歴史上、上泉流祖は山科言継からその結城家へ紹介状をもらつて北関東に出かけたとされている。

◇ 稽古では構える時に左太刀になるが、本来それでは構えを変える時に敵に攻撃される。通常、青岸または中段から打ち出ると「相かけ」られるのであるが、青岸または中段から瞬時に左太刀になり、敵の構える左小手を打てば「相かけ」られない。

瞬時に左太刀に持ち替わる気持ちで、必勝を行うのである。これには変化技がたくさんある。古い時代は、必勝がちに攻めると敵（打太刀）は撥草に取り上げて打ちを外す。そして、撥草から左首にかけて打ってくるのであるが、その時、裏に抜けて勝ち（敵の右側に回り込み、右小手を攻める）突き飛ばす。必勝勝ちを外された後、拳を示すようになったのは、「活人剣」を流祖から教授された石舟斎の時代からである。

これは技として完成させた後の形であつて、敵（打太刀）が撥草から左首（左肩）を順勢に打つてきた時、使太刀は打太刀の左小手を何度も打ち付け、最後は踏み込んで、青岸の筋で敵の右手の二の腕と左手の拳に打ち載る（両腕を制する）または突き飛ばし勝つ（結城ノシンサイの手裏・手裏剣。※左小手のことを手裏と呼ぶ）

これは勝口であつて型としてはまずい。型として拳を示し、打つて来る所を外して勝つ。打つ時は体が伸び上がることなく、体重を太刀に載せて突き飛ばす勢いが必要。型としての必勝は突き飛ばすところまでやっていないだけ。

また、右片手の太刀で逆に敵（打太刀）の左手を打ちつけ、左手で敵の太刀が取れる。乱剣でも同じことで、敵が青岸で左手を打つて来たときに、右手の太刀で敵の左手を打ちつけ、左手で敵の太刀が取れる。その時、力を入れると太刀筋がくるうので素直に太刀を下すこと。必勝では左手は太刀を触っている

だけで、右手で突き出すだけで打つ。天狗抄でも奥之太刀でも出てくる大切な太刀である。また、必勝で下がって拳を示し、敵が雷刀で拳を打ってくるのを、下から何度も跳ね上げて、最期に太刀先を上げて敵の両拳の中に入れ、相手の太刀を巻き取ることもできる。三学は洗練されているので多くの変化技はないが、九箇は変化技、応用技が豊富。

〈逆風〉

◇ どうってことはない。米子で柳生宗矩の兄の五郎衛門が8の形で何人も斬って有名になったというだけ。

〈十太刀〉

◇ 車の構えは、第一目標は撥ね上げること。十太刀の「十」は「重」ということ。取り上げ使いは撥ね上げる前までを稽古している。（本伝は）下から撥ね上げることの練習。撥ね上げて、撥ね上げて、敵が焦れて上から切ってきたのを、昔は縦の青岸の筋で敵の左首筋を切った（車剣）。車から縦の青岸の筋で敵の左首筋を切ることは遣り易い。中段からは難しい。それを新陰流にしてからは、車からクネリ打ちを使うようになった。

〈和ト〉

◇ 付ける拍子は天狗抄以上からしか習えないが、拍子を3つ（越す、当たる、付ける）に分けて拍子使う象徴として和トがある。

取り上げ使いの場合は、相雷刀から当たる拍子で使う。下から使いになるとしばらくは打太刀が打つてくるところを当たる拍子で使い、慣れると付ける拍子で使う。越す拍子はあまりやらないが、打太刀が打ってくるのを、後ろに外して越してから打つ。越す拍子は一番古い拍子。昔は相手の打ちを外して打った。次に古いのが当たる拍子。流祖が一番好きだったのが付ける拍子。宗厳（石舟斎）が流祖と初めて試合した時、越す拍子と当たる拍

子は知っていたと思われる。付ける拍子がわからなくて、流祖に3回負けた。流祖のすつと太刀が目に来て、目をつぶった時には、太刀で腕を取られ負けてしまう。付ける拍子を特訓すると「柔」ができるようになる。拍子の確認が重要である。

〈捷徑〉

◇ 捷徑の根本というのは、元々槍のつもりで使えという教えだったが、時代が経て両手で柄を持つ刀棒では難しくなったので、最初から太刀を中取りするようになった。型の変化の途中では、太刀の柄を持った状態で、敵が打ってきたら右手を太刀中へすべらせ当たり、落とすということもあった。

〈小詰〉

◇ 小詰の打太刀は「膝車」に構える。肩の線と太刀の線で、ちょうど九十度になる。大工が使う曲尺（かねじやく）に似ているので「曲尺打ち」という。これが塚原ト伝の「一つの太刀」である。敵（打太刀）が中段から真つ直ぐ打って来たとき、拍子をとって「曲尺打ち」で敵の左右（右手、左手）に打ち込む。敵は真つ直ぐ打ったつもりが、この「曲尺打ち」を使うと使太刀の肩に太刀先が外れる。もちろん最後は突きに移行する。

その「一つの太刀」を破るとするのが「小詰」である。取り上げ使いだと、城郭勢の構えから、打太刀が太刀を上げたときに、雷刀に上げて、打太刀が肱を打ってくるのを押さえるのである。下から使いでは、敵（打太刀）が城郭勢の拳を打って来るところを使太刀は水車勢のように打ち落とす。

〈八重垣〉

◇ 八重垣は京都あたりに行くとき、竹や木を交差して作った垣根のことである。使太刀が横雷刀から足を盗んで、打太刀の左手を押さえたとき、お互いの

太刀が八重垣の垣根になっている。また、深檐勢に下がり、拳を見せて、打太刀の裏を取って打つ太刀も、ぎざぎざの垣根になる。本来、拳を打つ太刀であるが、時代を経て首を打つようになったのである。拳を打ちを咄嗟に右手で太刀中を取って、大詰のように打太刀を押さえ込み、突き飛ばすこともできる。型では首をねらう稽古をするが、実戦になると融通を利かせて、首でも手でも一瞬にねらえるところを打つのである。

〈村雲〉

◇ 先制攻撃をする時には、隅をかけて打つ。必勝も十太刀も隅をかけて打っている。勝ち残るためには、敵を真つ直ぐから攻めるのではなく、隅にかけて奇策を用いて勝つものである。

◇ 「村雲」は内伝ではわかりにくい、本伝では間境で文を切り、欠いた拍子で隅かけて打ち込む。隅かけて打ち込んでも、昔の場合は敵（打太刀）が撥草に取り上げて外す場合がある。その時は隅（左後ろ）に下がる。隅に下がれば、敵はこちらの右手を打てず、打てても左肩なので、敵が打ち込んでくる左手（左拳）を簡単に打てる。最後に逆の青岸の筋で、敵の右肘と左拳を抑え込む。

敵が撥草から左肩ではなく、頭もしくは左の首筋に縦の筋で打ち込んで来ると、敵の右手（拳・肘）を打てる。古い斬釘（左肩（または右肩）に太刀先を上げて打ち落とす）を使うとよい。これは簡単な応用技。これを先に教えてしまうと、誰も努力しなくなるので、現在の稽古型がある。

顧問

（監修）

渡辺 忠成

師範

（作成）

上田 祐嗣
加藤 雅也
杉田 清磨

※注 「結城ノシンサイ政勝（ユウキノシンサイマサカツ）」

柳生厳長氏が「正伝 新陰流」の中で「九ケ（箇）の太刀は、上泉流祖が少来諸流の奥源を究め、その総てを採り容れた（綜攬）当時の諸流の祖師・諸家が秘伝した太刀の中、九箇を選び出して、その原流を伝えるとともに、これ等の太刀を、後年に柳生石舟斎がいわゆる「伊勢守流」として別の使い方を編み出して、新陰流とした太刀である。九箇の第一「必勝」は、左太刀（左の握りを上にして太刀を執る）で、結城ノシン斎が最も得意とした太刀、この太刀の術伝・口伝は、流祖から石舟斎―兵庫助利厳―七郎兵衛連也に正伝し、連也は「新陰流兵法目録」の口伝書に、これを明記している」とあり、

「新陰流兵法目録 本曰〓流祖・石舟斎的伝。敵曰〓兵庫助利厳」

九箇 必勝

本云。是ハ左太刀也。上段右ノ肩ニカマヘ、左ノ足ヲサキヘナス。敵、懸ニシテ身ニアラソフ時ハ、其ママ勝。又、調子ヲヌキ越テアラソフ時ハ、敵ノ右ノウリヨリ勝也。

敵曰。打太刀カネノツモリノ構也。ユウイノシンサイハ、シュリ・シュリケントツカフ也。直ニ、打ツケ々勝也。伊勢守流ニハ、ヌケテ勝也。

と記されている。

柳生厳長氏は、このユウキノシンサイは、塚原ト伝の高弟だった「結城政勝」であろうと記されている。結城政勝は下総結城氏の十六代当主で分国法「結城氏新法度」を制定した人物。確かにト伝の出身は下総鹿島で政勝がト部の高弟だったかもしれない。

しかし、もう一人「結城ノシンサイ」と思われる人物がいる。

【結城忠正】

生没年不詳。戦国・安土桃山時代の五畿内の初期キリシタン。当代の大学者にして

キリスト教布教に尽力。山城守。号は進斎。松永久秀の臣、命によりキリスト教の是非を審査のため清原枝賢とともに奈良で日本人ロレンソ修道士から教理を聴いて感銘を受けビレラ神父から受洗。霊名はエンリケ（アンリケ）。フロイスによると、学問・降霊術で著名、剣術家にして文章力にすぐれた文学に通暁。一五六九年（永禄十二）六月以降消息不明。

「国史大辞典」

一五七〇年（元龜元年）頃に信長から宗厳（石舟斎）に宛てた書状に「松永久秀とは何度も打ち合わせをしており（省略）後のことは山城守が説明する」というものが現存する。この書状は信長が上洛するために松永久秀をはじめ、柳生家にも助勢を願うものであるが、この書状から、宗厳と結城忠正とは交流があったと思われる。

上泉流祖が宗厳と宝蔵院で試合を行ったのが一五六三年（永禄六年）とされ、それ以降、またはそれ以前（上泉流祖の上洛は天文年間（一五三二～五五）にもあつたとされる）上泉流祖が京や西国で、結城忠正と交流を持った可能性は少なくはない。